

# 前田齊泰の『申楽免廢論』について－能楽に養生的価値を見出す理由－

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 趙 菁   |
| 雑誌名 | 金沢大学国語国文  |
| 号   | 44  |
| ページ | 28-39   |
| 発行年 | 2019-03-20  |
| URL | <a href="http://doi.org/10.24517/00054987">http://doi.org/10.24517/00054987</a> |



# 前田齊泰の『申楽免廢論』について

―能楽に養生的価値を見出す理由―

趙 菁

## 一 はじめに

加賀藩歴代藩主の中で長寿を得たと言える十三代藩主前田齊泰（一八一―一八八四、七十四歳）は天保十三年（一八四二）に重症の脚氣を患い、二年間に及ぶ闘病生活を経て、弘化二年（一八四五）の春に重病を克服し普段通りの生活に戻った。齊泰は医学的な治療が効果を上げたことに加え、仕舞を日課として養生したことそが回復を成し遂げた重要な理由だと確信し、その春に『申楽免廢論』を執筆し、能楽を為したことで廢人になるのを免れたと熱弁した。

能楽の動作と身体健康に関する最近の研究において、摺り足運動が身体バランス及び深層筋の鍛錬に効果的であることが検証されつつある。齊泰が『申楽免廢論』に述べた能楽の歩行による身体健康効果が注目されるようになっていく。

『申楽免廢論』において、齊泰が健康に関する能楽の有益性を論じたことは確かであるが、この書は単なる健康の保持増進の記録ではない。本稿は、『申楽免廢論』の著述目的を考察し、庶民に一般的な

養生知識や技術を教授する当時の養生関係書とは異なり、齊泰が養生と能楽を結び付けた考えには、藩主しかなし得ない養生法、そして藩主ならではの苦悩が秘められていることを指摘したい。

江戸時代は日本の養生文化が開花し、さまざまな種類の養生論が世に溢れて一時代を築いたと考えられる。とくに幕末に庶民向けの養生論が多く出現したと言われるが、藩主のような指導者層の立場による養生言説は少ない。日本の養生論の歴史においても、前田齊泰の『申楽免廢論』の存在は、その多様性の一様相として非常に意義のある養生書であると筆者は考える。

## 二 江戸時代の養生ブームにおける『申楽免廢論』

『申楽免廢論』の冒頭で齊泰は、父前田齊広の影響で幼い頃から能楽に親しんだことを振り返り、続けて次のように述べている。

阿爺ヨリ授リタル業ナレハ予ニ於テ終身之レヲ廢スベカラザルヲ孝ノ一事ト思ヒ

また、『申樂免廢論』の文末にも、父母から授けられた身体を健康な形で命ある限りまで保つことこそは「孝ノ極」の一つであり、父母の死後でも子は「黄泉」までその孝を盡すべきと述べている。七歳にして初舞台に立ち、また親子そろって舞台で演じたこともあった齊泰にとっては、父齊広の教えが生涯にわたって能楽を続ける支えでもあり、それを続けることこそが親孝行の一つであると考えていると見受けられる<sup>(4)</sup>。

江戸時代の養生論ないし日本の養生論史上の名著である貝原益軒の『養生訓』（一七二三）も「孝」の理念で養生を語り始めている。

人の身は父母を本とし、天地を初とす。天地父母のめぐみをうけて生れ、又養はれたるわが身なれば、わが私の物にあらず。

天地のみたまもの、父母の残せる身なれば、つつしんでよく養ひて、そこなひやぶらず、<sup>(5)</sup> 天年を長くたもつべし。是天地父母につかへ奉る孝の本也。

身体の養生に「孝」の理念を取り入れることは、儒教の影響をうけた江戸時代の養生論にはよく示されている論であり、それは『養生訓』のように身体と天地父母との関わりを説くことで、身体の高貴性と養生の術の重要性が密接にかかわることを示唆しているといわれる。『申樂免廢論』が「孝」の理念を首尾一貫してその論に取り入れていることは、能楽と養生のつながりの根底にこのような儒教的な考えが流れていることが窺える。

実は、『申樂免廢論』の著述時期の弘化期や特に齊泰の關病期間の天保期は、江戸時代の養生論を著述する最盛期にもあたる。それまでに比類のない養生ブームが引き起こされ、医者<sup>(7)</sup>の増加、薬局の繁

盛と並んで、多数の養生書の著述出版がその人氣沸騰の特徴を物語っている<sup>(8)</sup>。うちに十九世紀前期だけでも、江戸期全体の四割を占める養生書が刊行されたと言われる。

そして、養生論の内容も古代・中世においては中国の養生論を参照引用して著述されたが、江戸期以降にはさまざまな文献の解釈と人々の経験が積み重ねられ、日本独自の養生思想が形成されるようになった<sup>(9)</sup>。例えば、身体については中国の気の説明の引用だけではなく、自らの経験、身のまわりにある実際のものに目を向けて述べるようになった<sup>(10)</sup>。

能楽を養生として執筆した齊泰は、このような養生ブームにおいて自らの養生論を成し遂げようと思いついたのである。『申樂免廢論』には、当時の健康法である中国などの導引・按摩術も引用して紹介し、それらの運動との共通点を見出して能楽の効用を説明している箇所が所々見られる<sup>(11)</sup>。しかしながら、『申樂免廢論』は貝原益軒の『養生訓』及びその後の養生論のように、養生の具体的な規則が体系的な内容をもつて展開されている論とは異なり、前述のように自らの關病経験を一つの養生物語として語った一種特別な養生論である。そして、著者の藩主という立場から書かれた養生書は、当時においては非常に稀であった。

本論は『申樂免廢論』が如何に当時の養生論の知識を吸収し、応用したかを論じるつもりはない。江戸時代に広く伝わっていたそれまでの養生思想がその基底にあることはむしろ当然のことと考え、藩主として知識人として齊泰が自説を展開した背景に、彼が熱弁する原動力及びその構想の底流にある考えを分析していきたい。つま

り、藩主の特権に見えた健康法は、実に藩主の苦悩から生まれた健康法であり、それをアピールすることは、周囲の重臣たちからの非難を斥けながら、藩主の健康の重要性を主張し、理解と支持を得ようとする意図があり、更に自得したこの養生の知恵を継承してもらいたいという意志が斉泰にあったことにも論及したい。

### 三 『申楽免廢論』 についての先行研究

前田斉泰は幼少期から藩主の英才教育の一環として能楽を嗜み、経験を重ねて舞台上立つ樂しみを覚えた藩政後期の藩主の一人として、また金沢の能楽は日本「全国に冠たる隆盛」を誇り、「加賀宝生」と称えられたように、能楽の発展に尽力した幕末の藩主として知られ、能楽史とくに加賀藩能楽史の研究においては必ず取り上げられる人物である。とりわけ歴代加賀藩主の中で最も演能回数が多かった藩主として、斉泰の演能記録及び能装束に、研究のハイライトが当てられている。本論に取り上げる『申楽免廢論』については、脚氣回復前後の演能回数の変化が注目されているが、『申楽免廢論』の内容分析に関する詳細な検討は、能楽研究の分野においては管見のかぎりほとんどないといえる。ただし、これは寧ろ当然なことだと考える。何故なら、『申楽免廢論』は能楽についての書ではなく、斉泰自身が述べるように、この書は彼が「自得發明」した養生法であり、いわゆる彼の養生実践の記録と言えるからである。

一方、江戸時代の養生書についての研究においては、『申楽免廢論』に関する研究はほとんど見られなかったが、日本人の健康と運動の

歴史という視点から『申楽免廢論』に詳細な検討を加えた杉江正敏氏の研究を特筆すべきであろう。江戸時代における養生思想と身体運動の関連について、杉江氏は特に舞踊に焦点を合わせ、『申楽免廢論』における前田斉泰の疾病観と能楽を主体とする運動療法について詳細な分析を行った。

斉泰の疾病観については、杉江氏は当時の脚氣病についての認識（病理・療法など）と斉泰の脚氣についての理解を分析し、斉泰が脚氣の病因として提示した①飲食膏粱、②房事過多、③運動不足は、近世を通じて脚氣に限らず、諸種の病氣の誘因と認められるものであるが、脚氣の病因がさらに米穀に関わりがあり、豚鹿肉を食することが予防に繋がると斉泰が論を進め得たのは、米の流通と多くの藩士の症例を侍医団を通じて知ることができる大藩の当主という立場にあったからと論じた。また、斉泰の運動療法に対する考え方は、今村嘉雄氏が『日本体育史』で指摘した散策や導引などの静和な運動療法と、武術・舞踊などが運動として共通することに着目し、これを療法としようとした十八世紀以降の一部の医家の説と符合すると指摘した。

本論は杉江氏による以上の先行研究を踏まえ、能楽史、体育史からの俯瞰的視点を重視すると同時に、今まで論じられていない『申楽免廢論』の著作体裁及び文中の斉泰と医者たちとのやりとり、『申楽免廢論』の叙文、跋文、余論と合わせて、内観的に『申楽免廢論』に対する分析を行い、読者層の設定、能楽に打ち込む理論的根拠を養生より見出そうとする斉泰の著作意図を更に明らかにする。『申楽免廢論』の著作意図について、健康増進のために演能を正当化する

意を込めたとした杉江氏の分析に首肯しながら、斉泰の藩主という立場の人ならではの苦悩と葛藤がその養生スタイルにも表れていることを補足とする。

#### 四 『申楽免廢論』の読者層に対する斉泰の考え

##### 1 『申楽免廢論』の体裁

本論で使用した『申楽免廢論』は、金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵の昭和九年（一九三四）一月十九日に前田斉泰五十年忌に際して曾孫前田利爲によって復刊され活字印刷された書である。この書は前書きに記されているように前田家一門に配布された書である。同書に斉泰自筆の影模（『申楽免廢論』の本文の前に）が綴じこまれており、その自筆及び活字本を見ると、原本は楷書の漢字とカタカナによって書かれ、漢字が多く使われていることがわかる。

江戸時代の日本の書物におけるカタカナとひらがななどの使い分けに関しては、音声に重きを置くひらがな本に対して、表記に重きを置くカタカナ本、真名本がある。<sup>(19)</sup>医学書に関しては、漢文で書くという原則があり、その中で医学専門家を対象としたものは漢文で、医学初学者向けは漢字カタカナ混じりの分かりやすい文章で、医学知識のない読者に向けてはひらがな（くずし字）を用いるのが一般的で、いわゆる音声よりの享受と表記よりの享受の違いであると思われる。<sup>(20)</sup>

このような表記上の使い分け意識は、斉泰の文章にも適用できる

のではないかと考える。斉泰が幕府に提出した公的な文章、また「能楽」の表記を宣言する「能楽記」のような規範的なものは、漢字で書かれている。<sup>(21)</sup>日記や書簡、謡曲はくずし字（くずし漢字とひらがな）で書かれている。<sup>(22)</sup>そして『申楽免廢論』は楷書の漢字とカタカナで表記されている。

斉泰の自序である「小叙」によると、斉泰は「国字俗言」のつもりで『申楽免廢論』を執筆したとのことである。

其頃近臣侍醫等予カ重證愈後腓ノ筋攀セザルコト無病ノ常人ニ異ナラザル所其義如何其理如何ノ不審ヲ存ス且ツ武術弓馬ノ師モ亦予ガ平生ニ異ナラザルヲ見テ各感賞スルノ言アルヲ以テ予ガ一箇ノ發明スル所ヲ以テ彼ガ不審ト感賞トノ理ニ協合スルヤ否ト互ニ唇舌ヲ鬭シミルニ其理一定ニシテ恰モ一處ヨリ出ルガ如シ爰ニ於テ此意ヲ詳ニ記シテ後人ニ解釋セント思ヘ共不學文盲文章ニ達セズ故ニ國字俗言ヲ以テ其大旨ヲ著サント欲スト

（下線筆者）

周りの重臣、医者そして武術と弓術・馬術の師匠が斉泰の見事な回復を不思議に思い、それに対して自らの發明するところと彼らが疑ったり感心したりするところについて議論を重ねた結果、両者が合致して全く同じであることで、その内容を詳細に記して後の人に説明しようと思うが、文章が上手ではないので、「國字俗言」を用いてそのおおむねを著すことにしたと、斉泰は執筆の発端と体裁についての説明をしている。『申楽免廢論』は斉泰が漢文で書いた『能楽記』のような規範的なものでもなく、勿論、日記のような日常的なことを記録するものでもなく、また謡曲のような音声を重視するもので

もない。この書は、養生についての自らの考えを知識人である後人そして重臣、医者、師匠に分かりやすく教え、その疑問を解いて納得してもらったものとして著したことがこの体裁から読み取れるであろう。

続いて「申楽免廢論」の本文、「餘論」、「跋」、「叙」に沿って、著作意図及び周囲の反応が如何に反映されていくかを見てみよう。

## 2 「申楽免廢論」は「王公貴人」から「士庶人輕卒」までの為の書なのか

「申楽免廢論」の終わりに、「養生保壽」の助けの一つとして自分が悟り知ったのは、「琴瑟書畫詩歌連俳茶花蹴鞠申楽」等の「遊事」は、それらに耽ることさえないければ、他者から（これらをなすことについて）かれこれ誹謗する言葉がかけられるべきではないはずであると齊泰は述べている。

養生保壽ノ一助ト己レニ覺知スルニ於テハ琴瑟書畫詩歌連俳茶花蹴鞠申楽等ノ遊事ニ至リテハ之レ等ニ耽流サヘナクバ他ヨリ彼是誹謗ノ詞ハ入ルマジキ苦ナル歟

齊泰がここでいう、他者から能楽をなすことに誹謗する言葉をかけるべきではないはずであるとは何を指しているのか。「申楽免廢論」の随所にわたって能楽の有益性を強調し、理解してもらおう彼の積極的な姿勢とは異なり、批判的な意図がそこに込められることが窺える。では、齊泰がいう「誹謗ノ詞」とはいったい何を指しているのであろうか。

『加賀藩史料第十四編』天保七年の項目には以下のような記録が見られる。

天保七年

九月三日。前田齊泰自己の行状に反省すべき点なきかを諮問す

〔覺書〕

九月三日

一、坂井小左衛門別席に而申問候者、今朝御前江被召罷出候處、頃日所々用米差岡、下々之者及難儀候躰被問召、御心痛被遊候。右に付ては、御前御身分御憶被遊候品も無之哉之旨、昨日奥取次へも御尋被遊候。（略）

九月十二日。年寄中等、前田齊泰に当分演能を廢すべきことを

上申す

〔諸事要用雜記〕

九月十二日

一、當年不作に而、所々用米も指支候躰。此節御能杯は御不似合に付、暫不被遊方御宜かるべき由年寄中被申問候由、御用部屋中被申問。（略）（下線筆者）

この記録に示されているように、齊泰は天保七年（一八三六）九月の大飢饉に際し、人々の苦しむ現状に大変心を痛め、自ら自分の行動特に「遊」について何か反省すべき点がないかと下の者に尋ねた。それに対して重臣たちは庶民が困窮の時に能楽などをすることは相応しくないで、暫くはやめるべきことを上申したのである。実は、同じ天保七年の項目にはつぎのように、七月（晦日）米價漸く騰貴す。

十二月(廿六日) 飢餓の爲死する者多し

と飢饉におかれている加賀藩の悲惨な状況が多く記録されている。また一方で、以下のようなことも記されている。

八月 四日食用の米穀缺乏するを以て之が供給の方法を講ずべきことを命ず。

五日前田齊泰、諸般の政務に勵精し、特に本年の米價高貴なるを以て救済を怠るべからざることを諭す。

九月 十二日救窮川の米穀足らざるを以てその方法を講ず。

十月 十二日凶作なるを以て收納取扱及び窮民救済に關する心得を諭す。

これらは政務に勵んでいる齊泰が、凶作による米穀欠乏の救済方法に取り組むさまの記録である。このような財政困窮、飢饉に苦しむ民衆の現状に対し、藩主として反省すべき点があるかと尋ねる仁君の姿勢が見受けられるが、重臣たちが齊泰は当分演能を廃すべきであると上申したのは、むしろ齊泰が真摯に尋ねたからこそ答えたのであると推察される。この上申をきつかけに、以後、齊泰の演能記録は、杉江氏の研究にも示されているように、飢饉が落ち着く天保十年(一八三九)に二回が記録されるまで途絶え、天保十一年から天保十三年の四月まで年に一、二回しかなく、そのまま天保十三年五月に脚氣を發病したのである。

それまで齊泰は、自身の結婚、親族の訪問及び祝儀で能を催したり、演じたりすることが多かったこと<sup>(23)</sup>、そして齊泰の一回の演能はかなりの運動量であったことを合わせて考えると、例え重臣の上申を受け入れざる得なかった状況であったとは言え、この運動量がなくさ

れたことは、齊泰にとってかなりのショックだったであつたことが想像できよう。『申樂免廢論』に語られているように、齊泰は、自分の脚氣發病原因は演能を廃することによる運動不足が原因だと認識し、そして脚氣によつて浮腫し麻痺した体が平生の動きを取り戻したのも、この幼少期から習得し稽古し続けてきた能樂の効用によるものだと確信している。

そしてこの確信を、彼は医者、重臣、劍術・馬術の師匠に向けてアピールする自信と根拠のよりどころにもしているのである。ただし、齊泰はそのアピールにおいて、かなり強く問い詰める姿勢を、特に医者に向けていることが『申樂免廢論』によく見受けられる。重臣ではなく、医者に問い詰める姿勢は、重臣への直接の反論にせず、養生として論述することで、婉曲的かつ理論的に自分の考えを打ち出そうという考えであろう。また、医者との議論の中で、能樂の養生的価値があるという自説の説得力を検証し、能樂を行うことが治療の一環として構想されたことも考えられる。

医者との議論にとどまらず、齊泰は能樂が自分にとって一番相応しい運動方法であることを説明するにあたって、さらに武士としての教養である武術、放鷹、蹴鞠などを能樂と比較して自説を展開している。その比較を一覧にしたのが次の表一である。

『加賀藩史料』には齊泰の放鷹や行歩についての記録も多く見られるが、『申樂免廢論』においては、齊泰は能樂と放鷹などの間に一線を引いていることが確認できる。これは、『申樂免廢論』の本文が書かれた一年後にさらに書き記した「餘論」における武術と能樂の違いについての補足説明からも窺える。

しかしながら、武術、放鷹、歩行などの齊泰による前述の比較を見ると、彼は武術などについて、それ自体を否定しているのではない。当主としての立場から見ると、それらを毎日の脚部運動として続ける条件をそろえることの困難を最大の理由にしているのである。これは、保養の役割を果たすためには、自分の立場と今までの稽古経験においては、能楽が最適の運動療法であるという結論を導きたいからであろう。

齊泰だけでなく、実は齊泰の時代以前に、加賀藩五代藩主前田綱紀も養生のために能楽に励んでいた。綱紀が自ら語ったように、能楽は鷹狩などの代わりの運動のため、または暑氣払いの発汗のため行っているというのである。<sup>(25)</sup> また、齊泰の父親齊広が病気を理由に引き籠りになり、後に能稽古を用いて保養したことがあり、その保養に対しては、窮乏した藩財政を厳しく批判した藩士たちも好意的であったことも知られている。<sup>(26)</sup>

実は加賀藩主のみならず、他藩主の中にも能楽を身体健康維持のために行った例があることも知られている。<sup>(27)</sup> ただし、能楽の効用を鮮明に打ち出した齊泰の能楽に対する熱意は他には見られない。それは、重臣への批判、説得の意図、そして自分の身体でしか実感できない病氣から普段の生活に戻れたその喜びと重み、という三重の思惑が齊泰にしかなかったからであろう。

『申楽免廢論』の文末に、前述の父母の死後でも子は「黄泉」まで孝を盡すべきと書き、この篇を著して「後世王公貴人ヨリ士庶人輕卒ノ者マデノ爲」にすると述べるが、これは「王公貴人」から「士

\*表一 『申楽免廢論』による能楽と歩行、蹴鞠、武術、放鷹との比較

| 通常の歩き方  | 能楽   |
|---|--|
| 足先をあげず踵が浮く。<br>腓の裏筋が伸び緩むことがない。<br>足裏が見える。                           | 足先を上げて踵を地面につけて歩く。腓の裏筋が伸び緩む。<br>足裏が見えない。  |
| 歩行  | 能楽   |
| 気合が満たせない。   | 武藝の勝負に比べればその振舞は緩いが、心の働きの極に至って相手取る所の囁き方であったり、脇方であったり、地方であったり、相互の駆け引き、双方に先手と後手の争いなどすべて精神を集中して、心持をこめする所は恰も武術の勝負と異ならない。重い能装束に馴れることで甲冑をつける際の助けになり、一身の運動保養になる。 |
| 蹴鞠  | 能楽   |
| 腓の裏筋が伸び緩む。蹴るときに腓の裏筋は張る。<br>脚気による腓の痙攣に有益。<br>欠点は右足を主として左足は適当に対応するだけ。 | 左右の足は同等に運動。舞曲が蹴鞠に勝つ。   |
| 武術  | 能楽   |
| 相手がいないとできない。同流の相手を用意したい。<br>毎日の少しの空き時間では稽古することができない。                | 加賀藩中には十に八九は養生流であり、近臣の過半数は同門でいつでも稽古する相手がいる。<br>仕舞をするには、相手がなくてもできて自由である。   |
| 放鷹・歩歩   |  |
| 大人数を引き連れていくことで三十日に二、三回しかできず、脚部運動の効用が薄い。同伴者の迷惑になる。                   |  |



庶人輕卒」まで皆も能楽をしようという提案であるというより、職種や体質によって人が自分にとって行いやすい運動を適切な量で行うべきだと文中で説明されているように、齊泰は自分にとって最適な運動は自分で決めないといけないと認識していたことが窺える。

江戸後期の齊泰のような上流階級は養生は健康維持の手段でありながら、時には自分の意図することを目指すために養生の理念を活用し、展開し、それを近辺の人や後継者に伝え、理解してもらおうと努めた。これも彼らの養生書の特徴の一つとも考えられる。

一方で、齊泰と同じ立場の人たちは同様の考えを持っていたのだろうか。

## 五 「跋」「叙」に見る周囲の人々の

### 『申楽免廢論』に対する考え

『申楽免廢論』の「跋」を書いた前田利平（一八二四—一八四九）は、加賀大聖寺藩主前田家第十一代であり、彼は齊泰の論にある深い意図を悟る人が少ないのではないかと心配しながら、齊泰の見解は医師と一致していると認め、齊泰がいう能楽と武術の違いにも賛同する。しかし利平は、病気の回復には武術は実は害があり、武術の門人に百歳の壽を保つ人が少ない理由は、身体を無理に動かし、氣血の循環を妨げたからであると、武術に批判的な姿勢すら示す。特に、彼は農民の生き方については、体を激しく使い、荒い農作業を成すように見えるが、自分の力加減を盡して喜ぶ心を持ちながら無理な働きをしないことが氣血を循環する助けになり、生を養うに足るこ

とであると称賛している。そして彼は齊泰の著作意図について、以下のように説明している。

梅臯君此篇ヲ著述スル本意ハ後世公貴人ヨリ士庶人ノ者ニ至ルマテノ爲ニセント欲シテナリ宜ク學知利行セハヲノツカラ莫タル仁惠慈愛ヲ悟ルヘキ

「公貴人」から「士庶人」まですべての人が、この書からよく学びよく行くと語る利平には、能楽に対して齊泰ほどに熱意は高くなく、能楽の効用を認めながら、心身とも健康にするには、楽しみながら無理せず、に盡すことこそが養生法であり、一般庶民の楽観的な生き方からも学べるものもあると考えたのであろう。ここには、学問所を創設したことがある利保の、藩主としての姿も窺えるのではないかと考える<sup>28</sup>。

利平の跋文の後に書かれたと見る叙文は、越中国富山第十代藩主前田利保（一八〇〇—一八五九）によるものである。彼は齊泰よりはは十歳年上で、本草学者・国学者としても著名で、能楽についての著書もあり、武士の嗜むべき音楽の意で能楽を「武楽」とも称した人である<sup>29</sup>。『申楽免廢論』の叙文において、利保は齊泰の考えを妙案と評価するが、人事を盡して天命を待つことこそすべてのことに通じるものであると自分の考えを示している。そして彼は、自分が思う能楽とは、「神國神樂」の作法で「異域迂遠ノ舞樂」とは異なり、武家が天下を統一して世に榮えた恩恵で万民の幸福の楽しみであり、「勸善懲惡」のみの意味として淫らで品のない「戯作」の種類のものと同じく思ってはならず、能楽の極みは天・地・人の三極の秘め事を足踏で天下泰平、國土安穩して歡喜を現す「遊舞」にして今日の

祈禱となり、これを奏すれば病気が回復するはずであると語っている。

利保は養生あるいは運動面における能楽の効用には触れず、芸術あるいは精神面における能楽に対する彼の認識を明示していると見受けられる。彼は叙文の文末に病気を治すには病人の保養、医者の治療と薬の効用、そして天命に任せることにであると疾病観を述べている。この叙に見る限り、病気の治療に関しては能楽の効用を熱く語る齊泰の考えと利保の考えとの間には温度差がかなりあるのではないかと思う。これは読者に対して、著者が能楽好きだから能楽を必要以上に高く評価しているのではないかという疑いへの配慮というより、むしろ能楽に対する養生視点からの捉え方の違いが利保と齊泰にあるのではないかと考える。自分の身体でしか実感できない回復後の喜びを、能楽から得た幸いとする齊泰の熱意は利保にはなかった。利保は能楽をやはり武士が嗜む音楽として考えたのであろう。

## 六 おわりに

江戸時代のほとんどの養生書において、身体運動が養生法としてとりあげられ、しかも肯定的に評価され、その実践が推奨されている。特に化政期以降に導引の存在は希薄化し、代わって諸種の武芸、散歩、掃除等の運動上の効用が記載され始めた<sup>①</sup>。能楽については、舞曲より謡の養生的効用の方がよく言及されていると見受けられる<sup>②</sup>。また庶民生活の記録にも、能謡を楽しんでいたことが庶民日記から確認できる<sup>③</sup>。

謡も舞曲も健康によいが、幕末までにおいては、やはり舞台で舞曲できるのは、本論で取り上げられている齊泰のような藩主や重臣階級の人に限られていると言える。藩主や重臣クラスの人にとっての、限られた運動環境ならでは養生法とも考えられるのではないか。

能楽に打ち込むことは齊泰時代に限らず、特に財政緊迫の際には周囲から顰蹙を買っていた。齊泰はそれを意識して、藩主が健康であることは藩にとつてもよいことだとアピールする、政治的な意図を込めてこの「申楽免廢論」を著したと言えよう。能楽の有益性の伝達、健康法の伝授、政治面での著者の苦心工夫という複合的な角度から「申楽免廢論」を捉えるべきであると考える。この複合的な角度、目的こそ、江戸後期の上流階級による養生書の特徴の一つとも言えるのではないだろうか。

（本稿は、日本比較文学会第五十三回関西大会で発表した内容をもとに加筆したものである。）

### 注

（1）例えば以下のような研究が見られる。

- 松田雅弘等（二〇一二）「すり足運動と足踏み運動後の身体パフォーマンスに及ぼす検討」『了徳寺大学研究紀要』（六）、安田登（二〇一一）「疲れない体をつくる「和」の身体作法」祥伝社、天野勝弘（二〇〇六）「二章からだの礎—自分を知る・調える—Ⅲ動く」『健康なからだの基礎：養生の実践』日本養生学会、

市村出版、八六〇八九頁 安田登(二〇〇五)『能に学ぶ身体技法』ベースボール・マガジン社

- (2) 能楽と身体の間わりについて『申楽免廢論』を注目する以下の講談会も開催された。

「金沢能楽美術館特別展 武家の能と身体」「鼎談：内田樹×安田登×藪克徳 能と身体―加賀藩十三代藩主前田齊泰「申楽免廢論」をめぐって―」二〇一八年十一月三日、金沢能楽美術館

- (3) そのほか、管見の限り指導層による養生書は江戸中期の大名・老中である松平定信が書かれた『老の教』(一八二九)〔日本衛生文庫〕第二輯〕がある。

- (4) 齊泰の能の初演について『加賀藩史料』第十二編(六〇七頁)「文化十四年八月朔日」、父齊広との共演については『加賀藩史料』第十三編(二六七頁)「文政五年四月十六日」の項目に記載されている。

- (5) 『養生訓・和俗童子訓』石川謙校訂、岩波文庫版、一九六一、二四頁

- (6) 松村浩二(一九九七)『養生論的な身体へのまなざし』『江戸の思想』六巻、ベリかん社、九六頁

- (7) 瀧澤利行(一九九八)『健康文化論』大修館書店、鈴木敏夫(一九七三)「江戸時代における養生書の研究：身体運動の養生的価値をめぐって」『北海道大学教育学部紀要 第二十二号』  
(8) 立川昭二(一九九二)『養生論の現代的意味―江戸の健康観』『体育の科学』第四十一巻、十一月号

- (9) 瀧澤利行(一九九八)『健康文化論』大修館書店、二〇頁

- (10) 瀧澤利行(二〇〇二)『養生の楽しみ』大修館書店、二三頁

- (11) 片瀨美穂子(二〇〇六)「身体と嘘―江戸の養生言説における身体認識(上)―」「和歌山大学教育学部紀要 人文科学 第五十六集」、同(二〇〇七)「身体と嘘―江戸の養生言説における身体認識(下)―」「和歌山大学教育学部紀要 人文科学 第五七集」

- (12) 例えば、導引について華佗、老子などの説を取り上げている。

- (13) 「全国に冠たる隆盛」「加賀宝生」は佐久間夢裡「波吉甚次郎氏を訪ふ」〔北国新聞〕明治三十年九月一日(十日連載)の言葉であり、西村聡氏が『金沢能楽会百年の歩み』(下)〔金沢能楽会百年〕(金沢能楽会、二〇〇一、七九頁)で詳解されたように、明治三十年九月佐久間夢裡が金沢に帰省した波吉甚次郎を訪ね、甚次郎の言葉を聞き書きした体裁で訪問記を『北国新聞』に発表した。その訪問記によると、甚次郎は金沢における能楽の隆盛はとくに藩主齊泰の奨励により全国に冠たる有様、藩中の者が挙げてこの道に入り、果ては「加賀宝生」とまで称えられたと語っている。

- (14) 西村聡(二〇〇六)「加賀藩能楽史の展開」〔金沢能楽美術館図録〕金沢能楽美術館

- (15) 村上尚子(二〇一五)「研究ノート 加賀藩主前田齊泰の弘化二年御本復御祝能と能装束について」〔国立能楽堂調査研究〕第九巻、日本芸術文化振興会

- (16) (14) (15) 前掲論文

- (17) 杉江正敏（一九九四）「芸道・武道にみられる養生論」『大阪体育学研究』第三十三巻、四〇～四七頁、同（一九九二）「近世の稽古論」『体育の科学』第四十二巻、十月号、七七三～七七七頁、同（一九九二）「日本人の健康と運動の問題」『申楽免廢論』を中心として「大阪大学健康体育部紀要」第6巻、七五～九一頁
- (18) 「申楽免廢論」については「国書総目録」に「⑨尊経・田中允（弘化二写）⑩弘化三版・鴻山⑪申楽免廢論（昭和九）」との記録が見られる。『鴻山文庫蔵能楽資料解題（中）』（野上記念法政大学能楽研究所編、一九九〇）にこの資料の解題（四三三～四三四頁）があり、それによると「十九昭和九年翻印本 前田齊泰著『申楽免廢論』一冊」となり、「国書総目録」の本書の項が弘化三年の版本が鴻山文庫蔵のように記しているのは、本冊を版本とした単純なミス」「版本が刊行された形跡はまったくなく」となっている。これによると国会本や金沢玉川近世史料館活字本とは同じものかと思われる。「申楽免廢論」の書誌事情及び写本と活字本の相違については今後の課題の一つとして取り組みたい。
- (19) 入江敦志（二〇一六）『漢字・カタカナ・ひらがな 表記の思想』平凡社、三二頁
- (20) 前掲書三八～五二頁
- (21) 金沢市立玉川図書館近世資料館 平成二十六年秋季展「そして能は広がる——謡曲・能楽」の定着と金沢——
- (22) 金沢市立玉川図書館近世資料館 平成二十七年年度特別展「幕末

維新期の加賀藩」

- (23) 西村聡前掲論文十六頁
- (24) 杉江正敏（一九九二）前掲論文八二頁、一九六三年、岩波書店
- (25) 「松雲公御夜話追加」『御夜話集下編』日置謙校訂、石川県図書館協会、一九三四、五二四頁
- (26) 「加賀藩史料 第十三編」十一～十二頁
- (27) 西脇藍（二〇〇五）『岡山藩主池田綱政と「能」』吉備人出版、七五～七七頁
- (28) 「日本人名大辞典」『前田利平』より
- (29) 「国史大辞典」『前田利保』（担当：深井甚三）、『朝日日本歴史人物事典』『前田利保』（担当：高瀬保）より
- (30) 表章（一九八三）「世阿弥の芸論と武道」『日本の武道 武道と芸道』講談社、十八頁
- (31) 淵澤利行（一九九八）『健康文化論』大修館書店、二二頁
- (32) 貝原益軒の『養生訓』他に、例えば、八隅景山『養生一言草』（二八二五）には「諸芸を有増学びて後、謡舞杯を習ふも、士たるもの、業也、（中略）抑々此業は心と腹と腰とを定め、意氣四支行わたり、且音声を清うして、呼吸自ら安寧なるべし。故に老若ともに、音声を発するには、此舞謡は、能養生なり。」（『日本衛生文庫』第一輯、二七九～二八〇頁）となる。また鈴木胤「養生要論」（一八三三）にも「楽むに歌あり。哀しきに号哭あり。皆々音声を発して鬱氣を散ずるしかたなり。（中略）謡の師匠よく腹が減るといへり。総て腹の減ることは皆養生によし。」（『日本衛生文庫』第一輯、一〇九～一一〇頁）となる。

(33) 長山直治・中野節子監修(二〇〇九)『梅田日記 ある庶民が  
みた幕末金沢』能登印刷出版社

(本研究は、JSPS科研費JP17K02446の助成を受けたものです。)